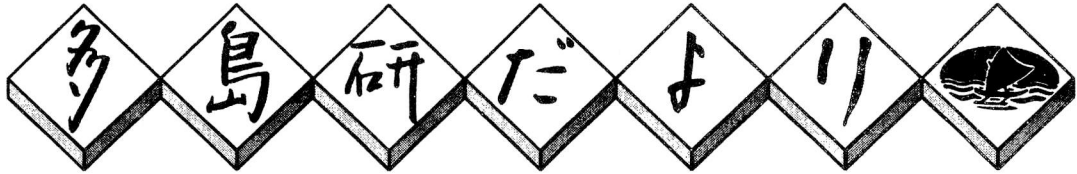


Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands



No. 47

鹿児島大学多島圏研究センター

2004年9月

大学博物館の使命

鹿児島大学総合研究博物館 大木 公彦

文部省学術審議会報告を受けて、1996年5月に我が国にも大学博物館が東京大学に誕生しました。この話をすると「大学には博物館がなかったの」、あるいは「大学に博物館を作ってどうするの」という質問がよく返ってきます。国が設置した総合博物館は東京大学総合研究博物館が最初なのです。明治以来、日本の大学で研究によって蓄積され、教育に使用された貴重な学術標本や資料の多くが、その研究・教育に携わった先生の退職とともに失われ、あるいは研究室の片隅に放置されていることに危機感を感じた文部省が、大学博物館の設立を思い立ったと言われていますが詳しいことはわかりません。しかし、一部の研究者は貴重な研究標本を守るために、外国の博物館へ寄贈していると聞いていますし、鹿児島大学に残された学術標本や資料の現状を見るにつけ、大学博物館の必要性を痛感します。

大学博物館の重要な役割に、大学の研究者が収集し、研究してきた貴重な標本や資料を整理し、管理保存して、学内外のこれからの研究に役立てていただくことがあります。同時に、大学で行なわれた貴重な研究の数々を、展示や出版物を通じて社会へ発信し、還元しなければなりません。教育・研究や様々な業務に追われ、忙しい毎日を送っている大学の研究者に代って、

研究標本・資料を整理、管理保存し、貴重な研究結果を社会に紹介していくことが大学博物館の基本的な業務なのです。

具体的にお話しますと、ある学会では研究し記載した新種を学会誌に投稿する場合に、その標本を博物館へ保管し、その登録番号をもらって論文に明記することを義務付けております。これは、外国の研究者が新種にした標本と比較するために、その研究者へ標本の送付を求めた場合、日本では多くの模式標本がその研究者の退職とともに失われたり、標本の保管が不十分で比較できなかったりすることが多いからです。言い換えれば標本の失われた論文は、その標本の記載が正しいのかどうか分からなくなってしまい、その論文の価値さえ失われてしまうのです。その問題をなくすために、忙しく標本收藏のスペースもない研究者に代わって博物館が保管し、内外の研究者のニーズに応えるわけです。

博物館が保管するものは標本だけではありません。貴重な研究資料も保管の対象です。図書館が書籍・論文・資料を中心に保管し、多くの方々に活用していただくのに対し、博物館は様々な研究を行なう過程で使用した器材や蓄積された図表類・データなども含め、研究結果を有機的に繋ぎ、意味付けをして一般国民にわかりやすく紹介していく使命をもっております（図書

館も書籍を中心としてではありませんが、同様な使命を持っていると認識しております。

これまでに述べてきたことから大学博物館の役割を理解していただいたと思います。それでは日本の大学博物館は研究者や社会のニーズに応えられる施設かと問われると返事に窮してしまいます。東京大学に続いて京都大学、東北大学、北海道大学、名古屋大学、九州大学に博物館が誕生し、2001年4月には鹿児島大学総合研究博物館がスタートしました。新制大学ではただ一つの鹿児島大学総合研究博物館ですが、教員スタッフは5名です。このスタッフ数で、鹿児島大学に保存されている100万点をこえる貴重な標本や資料を整理し、管理保存することを考えると胃が痛みます。かつて朝日新聞に「迫る独立行政法人化——欧米の美術館・博物館と比較して」という記事が連載されました。日本の7つの国立美術館・博物館の職員の総計は334名、それに対して、例えばニューヨーク近

代美術館の1館だけで職員が600名（学芸員は45名）、オランダのライクス・ミュージアムは職員が400名だそうです。ところが、大学博物館の教員スタッフは東京大学博物館で10名、京都大学博物館が9名、九州大学博物館が8名、すでに述べたように鹿児島大学博物館は5名で、お寒い限りです。3年前の日本経済新聞の「大学に眠る宝の山」という記事の中に「予算・人手なく財産見殺し」の小見出しがついていましたが、的を射ており感心したことがあります。

大学博物館が一般の博物館と異なる点は、「大学」で教育・研究を行なう過程で蓄積された知的財産を管理し、情報公開することにあるのです。そのためには大学教職員の理解と協力が必要です。8つの大学博物館のひとつとしてスタートした以上は南九州から沖縄に至る地域の大学博物館にふさわしいものを構築しなければと思っています。皆様方のご理解とご協力をこころよりお願いいたします。

多島域フォーラム

シンポジウム

南太平洋における人と自然の“共生”

2004年7月10日(土)

大学院連合農学研究科棟3階会議室

Agriculture and the Economics of Pacific Islands Countries: Issues and Challenges

太平洋島嶼諸国の農業と経済：課題と取り組み

Mahendra Reddy

(南太平洋大学・

鹿児島大学多島圏研究センター)

業部門が果たす役割を概観し、太平洋島嶼経済にとって成長の源泉となりえる主な農業に関して検証し、この源泉の利用という観点から太平洋島嶼国が直面する課題を検討した。グローバル化、そして急速に変化するグローバル経済環境の変化は国内の政策の変化に多大な影響力を持ちつつある。本報告では、太平洋島嶼国の経済がグローバルな変化に対し国レベルで行ってきた対応について検証した。さらに、本報告では島嶼国経済の直面する特有な問題の枠組みを提供した。

本報告は太平洋島嶼国経済の発展において農

南太平洋の深海底鉱物資源ポテンシャル

岡本信行

(独立行政法人石油天然ガス・
金属鉱物資源機構)

南太平洋諸国は大小多くの島々からなる島嶼国であり、その国土は狭く陸上の資源は限られているが、その排他的経済水域 (EEZ) は、多くの離散した島々からなるが上に広大なものであり、太平洋全体の16%を占める。これらの国々にとって海洋、海底は貴重な資源を有し、経済発展を考える上で、これらの利用は不可欠なものといえる。

1985年以降、日本政府は、SOPAC (南太平洋応用地球科学委員会) 及び加盟国の要請に応え、鉱物資源探査専用船「第2白嶺丸」を活用し、南太平洋諸国の EEZ 内において、海洋資源調査を実施してきている。その結果、クック諸島海域でのマンガン団塊、マーシャル諸島海域でのコバルト・リッチ・クラスト、フィジー諸島共和国海域での海底熱水鉱床の賦存状況が明らかになりつつある。今回のシンポジウムでは、深海底鉱物資源の概要、その探査方法について紹介するとともに、南太平洋諸国における深海底鉱物資源のポテンシャルについて述べた。

パラオの農業

高橋敬一

(元パラオ農業局)

パラオ共和国は日本の真南、赤道付近に位置し、火山起源の300以上の海洋島からなる。最大の島バベルダオブ島 (屋久島ほどの大きさ) の土壌は強酸性。2万人あまりの人口のほとんどが首都のある小さな島コロール島およびその周辺に集中する。かつての日本の南洋庁所在地。1994年にアメリカより独立したが、現在も様々な面においてアメリカの影響が強く見られる。国家財政は他国の援助に負うところが大きく、主要資源は“国連の一票”。観光、鮮魚の輸出以外の外貨獲得手段はないに等しく、ほとんどの物資は輸入に頼っている。外国資本の参入は厳しく制限され、実現した場合も問題が多い。本来の主食はタロイモで、マンゴーなどの果樹も含めて自家消費用の農業が主体。首都向けの野菜栽培農家も若干ある。首都のスーパーにはアメリカからの輸入農産物、缶詰等が多く見られ、食生活もアメリカ化しつつあり、成人病が大きな問題となってきた。パラオからの農産物の輸出はない。物資の輸入、持ち込みに伴う病虫害の進入は急増しつつあり、その防除は困難を極める。以上、外国資本参入の制限、生活様式の変化、進入病虫害の急増等により、パラオの農業は将来、衰退をたどるものと思われる。

多島圏研究センター研究会

第46回

2004年2月16日(月)

フィリピンにおけるキリスト教と民俗世界

川田 牧人
(中京大学社会学部)

フィリピンは東南アジア地域にあって唯一のキリスト教国といわれ、国民の8割以上がローマ・カトリックを信奉している。教会を中心とした典礼や活動だけでなく、日常生活のさまざまな場面にキリスト教が浸透した様態は、「フォーク・カトリシズム」と称されることもある。しかしこれは、キリスト教が民俗を包摂した様態、あるいは民俗がキリスト教化したものとしてとらえられる概念であり、一面的でもあるため、民俗世界からみる必要がある。本発表では、フィリピンのキリスト教化の歴史を概観した後、教会を中心としつつも民俗レベルでの展開がみられるキリスト教儀礼、さらに教会とは一見無縁であるような民俗的実践としての呪術信仰などを検討する。これらの局面から、民俗世界に生きる人々が、必ずしも「フォーク」(個別)と「カトリシズム」(普遍)との二分法によって、彼らの諸活動を構成しているのではない側面があらわれるはずである。これらから、民俗世界における人々の生活そのものを捉える視点の可能性を考察した。

第47回

2004年3月1日(月)

熱帯雨林の生態：スマトラにおける最近25年間の動態

米田 健
(鹿児島大学農学部)

スマトラ島の雨林をこの25年間にわたり観測してきた。数百年の樹齢をもつ雨林の巨木にとって、25年という歳月はさほど長いものではないだろう。しかし、スハルト政権下での四半世紀に森林景観は大きく変化した。抜伐林がもとの状態まで回復することなく、大規模アブラヤシ園へ拓かれることが多い。また新植林・再植林という環境保全を名目に、軽度の択伐林が皆伐され、早成樹の植林へ移行というケースもある。人々の生活は豊かになったように見えるが、不公平感は一層大きくなっているのではないか。新政権下で進められている地方分権化により、森林管理がいっそう乱れた。顕在化しつつある異常乾燥・森林火災などの自然災害が劣化した雨林に一層大きな傷を負わせている。その実態を報告した。

第48回

2004年3月15日(月)

ガラパゴス諸島：生物多様性とその保全

伊藤 秀三
(長崎大学名誉教授)

ガラパゴス諸島の生物相は、祖先生物起源地からの大きな地理的隔離に原因して非調和である。このことが空白の立地とニッチを産み出し、

生物と生態系に島嶼症候群（放散進化、高固有種率、草本の木本化、動物の逃避行動欠如ほか）の刻印を与えた。南東貿易風の雨影効果が群島に特有の植生ゾーネーション構造を作り、それが植物の種分化の背景をなす。

生物多様性は2つの側面をもつ。1は分類学的多様性(Systematic diversity)、2は生態学的多様性(Ecological diversity)である。1については島ごとの種分化（植物：キク科 *Scalesia* 属、サボテン科 *Opuntia* 属ほか、動物：ダーウィンフィンチ、マネシツグミ、ヨウガントカゲほか）、さらに植生帯に沿った種分化（キク科 *Scalesia* 属、ムラサキ科 *Tournefortia* 属、トウダイグサ科 *Croton* 属）に認められる。2には、群落の種多様性（アルファ多様性）と群落間の種多様性（ベータ多様性）がある。植物のアルファ多様性は非調和植物相を反映して極端に低く、同等の気候下の大陸島の約半分である。ベータ多様性は、南東貿易風を受ける風上側の南斜面で高く、風下側で低い。

空白の立地とニッチを埋めるべく進化した *Scalesia* の森林では、極度に低いアルファ多様性を反映して、森林は一斉枯死と一斉再生を繰り返す。自然生態系は、一部では人の居住/農耕ならびに人が持ち込んだ家畜動物による植生破壊、偶然に持ち込まれた帰化動植物による空白の立地やニッチへの侵入によって脅かされている。1964年と1968年の創設以来、ダーウィン研究所と国立公園管理局は協力して自然保全への取り組みを続けている。

第49回

2004年4月12日(月)

異常プリオン分解酵素の発見

岡 達三
(鹿児島大学農学部)

ラット肝臓から進化的に高度に保存された新規な蛋白質 PSP を発見した (Oka *et al.* J. Biol. Chem. 270, 30060-30067 (1995))。PSP の一次構造は機能未知の YER057c/YJGF ファミリーと高い相同性を示し、大腸菌からヒトに至るまで高度に保存されていることが明らかにされた。これらの事実は PSP が細胞内において重要な生理機能を果たしていることを示唆している。一方、ドイツの Dr. K. Carugo との共同研究によって PSP の立体構造を解明した。興味あることに PSP の立体構造や熱耐性であるとかプロテイナーゼ K に対する耐性などの化学的性質は異常プリオンタンパク質と酷似していた。PSP を異常プリオンタンパク質のモデルとして用い、プロテアーゼをスクリーニングした結果、ある種の放線菌を培養した上澄み液から PSP を分解する酵素を発見した。本酵素は羊のスクレイピー由来の異常プリオンやヒトのクロイツフェルト・ヤコブ病由来の異常プリオンをも分解した。精製された異常プリオン分解酵素は、分子量約20,000であり、至適 pH はアルカリ性を示した。異常プリオン分解酵素を用いた応用研究についても紹介した。

第50回

2004年5月24日(月)

Modelling Poverty Dimensions of Fiji's Urban Informal Sector Operators

Mahendra Reddy
(鹿児島大学多島圏研究センター)

Growing poverty is a cause of concern for international, regional and local organisations and policy makers. The growth of the urban informal sector resulting from the urbanisation process has also contributed to the rise in urban poverty. The rise in urban informal

economy has both beneficial and detrimental effects on the urban formal economy. It has been argued that the urban informal sector plays an important role in poverty alleviation though stark cases of poverty are evident in the urban informal sector. This duality needs to be examined in light of the socio economic factors of the urban informal population. This study utilises primary data from two cities and a town to examine the contribution of the urban informal sector to employment creation and poverty alleviation. The findings reveal a significant positive contribution of the informal sector towards poverty alleviation and income generation. The data is further utilised to examine the household specific factors affecting poverty in the informal sector.

第51回

2004年6月5日(土)

総合研究プロジェクト「離島の自律的発展のための学際的研究」研究成果報告会

総合教育研究棟102号

1. 社会分野

与論島における移住者とまちづくり

田島康弘

(鹿児島大学教育学部)

歴史から見た与論島の魅力は発信されているかー環境の新世紀の視点からー

原口 泉

(鹿児島大学法文学部)

与論島における観光化と地域振興

桑原季雄

(鹿児島大学法文学部)

亜熱帯・温帯境界域としての島おこし課題ー与論における地域特性の再発見と地域振興ー

長嶋俊介

(鹿児島大学多島研)

2. 医療分野

与論島のヘルスケアシステムに関する医療人類学的研究

宮園夏美

(鹿児島大学医学部)

外海島嶼における溺死診断のためのプランクトン検査の問題点と検査法の検討ー与論島をモデルとしてー

吾郷一利・吾郷美保子・小片 守

(鹿児島大学医歯学総合研究科)

農業従事者におけるライフスタイルと健康

青山公治

(鹿児島大学医歯学総合研究科)

与論島における広東住血線虫の調査

野田伸一

(鹿児島大学多島研)

3. 環境分野

与論島における海岸ゴミ実態調査

河合 溪

(鹿児島大学多島研)

底棲有孔虫による炭酸カルシウム生産量の推定と付着型有孔虫についてー与論島を例としてー

八田明夫

(鹿児島大学教育学部)

南西諸島の潮間帯におけるラビリンチュラ類の分布と有機物分解

坂田泰造

(鹿児島大学水産学部)

4. 水産業分野

与論島の漁業、観光（ダイビング）からみた海洋環境の問題点

山中有一
(鹿児島大学水産学部)

与論島の漁具漁法

江幡恵吾
(鹿児島大学水産学部)

与論島の海藻相と海洋環境

野呂忠秀・生駒友美
(鹿児島大学水産学部)

5. 農業分野

南西諸島における熱帯果樹栽培の原状と問題点

日高哲志
(鹿児島大学多島研)

カンキツグリーンング病を保毒するミカンキジラミの移動について

坂巻祥孝
(鹿児島大学農学部)

与論島における在来作物の遺伝的変異

一谷勝之・遠城道雄
(鹿児島大学農学部)

島嶼域におけるヤムイモ栽培とその品種保存

遠城道雄・一谷勝之・富永茂人・山本雅史
(鹿児島大学農学部)

日高哲志

(鹿児島大学多島研)

沖縄県八重山地区における牛の消化管寄生線虫の寄生状況

安田宣紘
(鹿児島大学農学部)

南西諸島における果樹類遺伝資源の分布調査および分類

山本雅史・富永茂人
(鹿児島大学農学部)

離島における農業、特に果樹農業の展開

富永茂人
(鹿児島大学農学部)

第52回

2004年6月21日(月)

黒潮海域におけるプランクトン生物量、生産量、群集組成の季節変化

小針 統
(鹿児島大学水産学部)

プランクトンから魚類へ至るエネルギー効率 (Ecological efficiency) は、食物網の構造に大きく影響を受けることが知られている。すなわち、食段階の多い食物網では途中でのエネルギー消費が多くなるため、より上位の食段階では利用できるエネルギーが少なくなるからである。これまで、太平洋におけるプランクトン食物網に関する研究は、大型プランクトンが卓越する生産性の高い海域を中心に行われてきたが、小型プランクトンが卓越する亜熱帯海域についてはあまり行われていない。本セミナーでは、黒潮海域におけるプランクトン生物量、生産量、群集組成の調査結果から、亜熱帯海域のプランクトン食物網の特徴について述べた。

黒潮海域において、プランクトン生物量には明瞭な季節パターンは認められなかったものの、バクテリア、独立栄養ナノ鞭毛藻、カイアシ類が1年を通して卓越した。植物プランクトン日間生産量は、独立栄養ナノ鞭毛藻によるところが大きく、明瞭な季節パターンを示さなかった。動物プランクトン日間生産量は夏に増加する傾向を示し、バクテリアと従属栄養ナノ鞭毛藻がこれに貢献した。年間生産量は、植物プランクトンで177.0、動物プランクトンで244.3 gC m⁻² year⁻¹と推定された。溶存態から粒状態炭素への転換者であるバクテリアを考慮すると、バク

テリアの生産量 ($135.8 \text{ gC m}^{-2} \text{ year}^{-1}$) と植物プランクトン生産量の合計 (つまり $312.8 \text{ gC m}^{-2} \text{ year}^{-1}$) が、動物プランクトンが利用できる量となる。黒潮周辺の亜熱帯海域では、ナノプランクトンを介するエネルギーの流れが重要であるかもしれない。

最近の出版物

South Pacific Studies Vol. 24 No. 2

Muhammad Ashfaq, Abida Nasreen and Ghulam Mustafa Cheema: Advances in Mass Rearing of *Chrysoperla* (Stephen) (Neuroptera: Chrysopidae)

James P. Terry: Shoreline Erosion on a Low Coral Island in Fiji - Causes and Consequences

South Pacific Studies Vol. 25 No. 1

Iwagawa Tetsuo, Eguchi Satoshi, Okamura Hiroaki, Nakatani Munehiro and Hase Tsunao: New Phenylpropanoid Diglycosides from *Viburnum furucatum*

Tukirin Partomihardjo, Suzuki Eizi and Yukawa Junichi: Development and Distribution of Vascular Epiphytes Communities on the Krakatau Islands, Indonesia

Kinoshita Kisei, Kanagaki Chikara, Iwata Shino, Koyamada Megumi, Goto Kazuhiko, Hidaka Ko-ichi, Andrew Tupper and Iino Naoko: Ground Observation of Volcanic Plumes and High SO₂ Concentrations at Sakurajima Volcano

Mahendra Reddy: Economic Analysis of Artisanal Fisheries in Fiji: Issues of Profitability and Sustainability

Yukiko Inoue, John Sanchez and Olympia Terral: The Chamorro Adult Male Identity and Development

南太平洋海域調査研究報告 No. 40 (2003年12月)

制度を生きる人々—フィリピン地域社会経済の学際的研究— (西村 知・川田牧人 編)

多島圏研究センター専任・兼務教官の海外出張および研修記録 (2004年1月～2004年8月)

所属	氏名	期間(開始)	期間(終了)	国名	用務
理学部	根建心具	H16.1.1	H16.1.6	アメリカ	「太古代における生命と環境の共進化」に関する共同研究
法文学部	黒田景子	H16.1.16	H16.1.22	タイ	「東南アジア大陸部・西南中国の宗教と社会変容-制度・地域・実践」に関する資料収集および研究打ち合わせ
農学部	橋本文雄	H16.1.25	H16.2.1	オーストラリア	第3回アントシアニンに関する国際研究集会に出席・発表ならびに資料収集
多島研	河合 溪	H16.2.2	H16.3.1	インドネシア・フィジー・グアム(USA)	地球温暖化による南太平洋低島部の水没が及ぼす生物多様性を与える影響に関する調査研究
農学部	冨永茂人	H16.2.8	H16.2.23	モロッコ	第10回国際カンキツ学会および評議員会出席
法文学部	尾崎孝宏	H16.2.10	H16.2.26	中華人民共和国	移動民の定着化および水利用に関する現地調査
法文学部	新田栄治	H16.2.15	H16.2.19	タイ	メコン流域における金属資源とその利用に関する考古学的研究
多島研	長嶋俊介	H16.2.21	H16.2.28	ソロモン諸島	島嶼域生活環境実態調査
教育学部	木下紀正	H16.2.22	H16.2.26	フィリピン	マヨン火山噴煙自動観測打ち合わせ
農学部	坂田祐介	H16.2.23	H16.3.1	中華人民共和国	紅花ツバキ野生種の調査・採取
総合研究博物館	落合雪野	H16.2.29	H16.3.7	ミャンマー	京都大学とミャンマー林業大学、林業研究所の共同研究報告会への参加
教育学部	木下紀正	H16.3.15	H16.3.23	モンゴル	黄砂発生の自動映像観測打ち合わせ
水産学部	寺田竜太	H16.3.19	H17.1.17	ハワイ(USA)	在学研究(ハワイ大学マノア校)のため
総合研究博物館	落合雪野	H16.3.20	H16.3.25	インドネシア	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 COE プログラムワークショップへの参加
法文学部	尾崎孝宏	H16.3.25	H17.3.31	中華人民共和国	北京日本学センター客員教員としての授業担当

所 属	氏 名	期間(開始)	期間(終了)	国 名	用 務
理 学 部	根建心具	H16.3.28	H16.4.4	ア メ リ カ	宇宙生物科学国際会議出席
生命科学 資源開発 研究セン ター	田浦 悟	H16.4.7	H16.5.7	ヴェトナム	(国際協力事業団ハノイ農業大 学強化計画専門家) ハイブリッ ドライスの多収性に関する研究
水産学部	市川 洋	H16.5.15	H16.5.21	トカラ海峡	海洋環境観測実習
農 学 部	岡本繁久	H16.6.4	H16.6.14	イ タ リ ア	国際ポストハーベストシンポジ ウム参加・発表および抗酸化化 物を含む北イタリア産作物の調 査
水産学部	江幡恵吾	H16.6.9	H16.6.18	東 シ ナ 海	漁具試験実習
教育学部	木下紀正	H16.6.20	H16.6.26	ア メ リ カ	第2回火山灰航空安全対策国際 会議出席
院医歯学	安藤哲夫	H16.6.27	H16.7.3	ス ロ ベ ニ ア	国際水銀会議における講演発表
農 学 部	濱名克己	H16.7.10	H16.7.20	カ ナ ダ ・ ア メ リ カ	第23回世界牛病学会参加・発表 およびオリエンタル大学、コー ネル大学視察
総合研究 博 物 館	落合雪野	H16.7.13	H16.7.19	タ イ	国連大学「人間、土地管理、環 境変化プロジェクト」専門家会 議出席
多 島 研	長嶋俊介	H16.7.20	H16.7.29	パ ラ オ	太平洋芸術祭出席
理 学 部	鈴木英治	H16.7.25	H16.8.9	シンガポール	研究打ち合わせおよび熱帯低地 林調査
教育学部	久保田康裕	H16.7.30	H16.8.11	ロ シ ア	5th International Conference on Disturbance Dynamics in Boreal Forests
理 学 部	根建心具	H16.8.4	H16.8.16	オーストラリア	太古代の生物圏と原始地球環境 の解明の研究
農 学 部	米田 健	H16.8.5	H16.8.28	マレーシア	熱帯雨林の分解系から出る二酸 化炭素フラックスに関する研究 の現地調査
多 島 研	長嶋俊介	H16.8.10	H16.8.16	中 華 人 民 共 和 国	中国洋県における野生朱鷺保護 地視察調査
法文学部	西村 知	H16.8.10	H16.9.19	フィリピン	農村調査および資料収集
総合研究 博 物 館	落合雪野	H16.8.11	H16.9.4	ラ オ ス	総合地球環境学研究所プロジェ クトによるラオス北部農村での 現地調査
水産学部	野呂忠秀	H16.8.15	H16.8.23	フィリピン	UPC 等との拠点プロジェクト 共同研究

所 属	氏 名	期間(開始)	期間(終了)	国 名	用 務
多 島 研	野田伸一	H16.8.15	H16.8.29	ヴ ェ ト ナ ム	熱帯性感染症の振興・再興の要因とそれに基づく防除対策の研究
多 島 研	河合 溪	H16.8.17	H16.8.26	エ ク ア ド ル	島嶼におけるエコツーリズム調査
教育学部	八田明夫	H16.8.18	H16.8.25	中 華 人 民 共 和 国	科学技術教育研修会シンポジウム出席および学術交流
法文学部	黒田景子	H16.8.21	H16.9.10	タ イ ・ マ レ ー シ ア	「東南アジア大陸部・西南中国の宗教と社会変容－制度・地域・実践」に関する情報収集
農 学 部	橋本文雄	H16.8.22	H16.8.30	フィンランド	第22回ポリフェノールに関する国際会議出席・発表
教育学部	木下紀正	H16.8.24	H16.8.28	大 韓 民 国	2004年度国際放射シンポジウム出席と東アジア域における黄砂自動映像観測研究発表

多島研だより No. 47 平成16年 9 月28日発行

発 行：鹿児島大学多島圏研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元 1 -21 -24

TEL：099(285)7394

FAX：099(285)6197

E-mail: tatoken@kuas.kagoshima-u.ac.jp

URL: <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/>
